

白山ふるさと文学賞

第十四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年 小説の部 優秀賞

「ハイエナのジエシー」

松陽小学校六年

西川^{にしかわ}

さとみ

その日は急いで草の中に逃げこんだ。あたしはライオンがその場を過ぎざるのを待った。ねこみをおそわれて、何頭か死んだ。何頭かはにげて行つた。結果、そこに残つた生きたハイエナはあたしだけだつた。ライオンがいなくなると、あたしはサバンナをさまよつた。何日も何日も。空は星がかがやいていた。もうダメかな、なんて思った。そしたら、

「だれか、そこにいるの？」

と、声が聞こえた。力をふりしぼつて見上げると、少女の顔があつた。少女はおどろいた顔をしていたけれど、すぐにほほ笑んで、あたしをだき上げた。ひさしぶりにだれかにふれて、ねてしまった。

次の日、目を覚ますと、少女の顔と、それから、やさしそうな女の人の顔があつた。すると、二人はにっこり笑つてから

「私はラーリー。こっちはお母さん。フィオニーっていうのよ。」

と自己紹介してくれた。あたしの名前も聞かれたけれど、人間の言葉は話せないし、第一あたしには名前がなかった。あたしはサバンナのハイエナの「あたし」。だから名前なんてない。こまっていたら「じゃあ、あなたはジェシー。これからはハイエナのジェシーね。」と名前をくれた。ジェシー。すてきなひびき。とつてもうれしかった。

それから、ラーリーとフィオニーとくらし始めた。毎日が幸せだった。いっしょに草原を走り回つたり。意地悪でごうまんアラムに、イタズラをしたり。フィオニーはいつもおいしいごはんをつくつてくれて。ラーリーといっしょに満天の星空を見たりもした。草むらにねそべり、夢の話をしてくれた。いつかあの星を間近で見られるような宇宙飛行士になりたいんだと話してくれた。ラーリーは天体が好きで、星や月の話、それに関するおとぎ話や言い伝えなんかも聞かせてくれた。こんな時間がいつまでも続いたらいいのに。

ラーリーの話聞いてから、自分は、あたしは何をするべきなんだろうと考えるようになった。二人のためにお金をかせぐことはできな

いし、何かごうかなものを用意できるわけでもない。だけどたくさん之恩がある。二人に出会つて生きられて、こうして幸せに過ごすことができている。あたしだけ、何もせずごろごろ過ごす？。そんなのいやだ！。上手く考えられない自分にイライラする。苦しい。苦しいよ。大切な人のために何もできないなんて。ねえ、神様。あたしはどうしたらいいの？。

そう思つた矢先の出来事だつた。ふつうの日だつた。ラーリーとフィオニーは買い物に出かけて、あたしだけで留守番をしていた。少しいつととして、ねかけたその時。ドン！と大きな音がした。ドアがふつとばされたのだつた。何がいるのかわからない。とつさに机の下にかくれた。息を殺して、様子をうかがつた。そこにいたのはライオン。少しはなれた草原でそこら一帯を治めている、オスライオンのドド。おかしい、何でこんな所までドドが来たのかわからない。もうすぐラーリーたちが帰つて来てしまう。ドドは強い。体がものすごく大きく、とにかく強い。走るのそれはそれほど速くはないけど、頭がキレる。まさに百獣の王といった感じだ。ラーリーとフィオニーは細く、ドドのあのするどいつめでひつかかれたりなんかしたら、ひとたまりもない。おまけに家は病院やけいさつ署とはなれている。どうしよう。だけど、自分はこの時のためにここに来たのではないか、と思つた。あたしだけじゃ、ドドをたおすことなんて、どうても無理だ。だけど、少しでもきずをつけることはできる。もちろんこわい。死んでしまうかもしれないから。その時、ラーリーの笑顔がうかんだ。この笑顔を守るためにも、ジェシーは動き出した。ドドの前に立ちはだかつた。ドドはするどい目でこちらをにらみつけた。するどいつめをふり上げた。こわい。でもやるんだ、ジェシー！。ドドの前足をすりぬけ、大きな体にかみついた。ハイエナのあごはすごく強い。当然すごくいたいから、ドドは少しひるんだ。でもすぐに、体をふり、ジェシーをふつ飛ばした。そしてするどいつめでジェシーをひつかいた。いたい。き

ず口から、血がだらだらと流れる。しかし、ジェシーも負けじと対こうする。ドドもさすがにつかれ、人の気配を感じるとにげていった。やった、やった。成功した。血をはき出しながら、たおれた次のしゅん間、ドサツとドアの方から音がした。そこには落ちた買い物ぶくろと真っ青な顔をしたラーリーがいた。

「ジェシー?。」

ふるえた声でラーリーが呼んだ。ラーリーは白いタオルであたしをつつむと、すごい勢いで走り出した。ラーリーの顔はよく見えなかった。鼻の先にしずくが当たる。しよっぱくて、泣いているんだな、とわかった。少しづつ苦しくなってきた。あ、これあたし、死ぬんだなと思った。手足も上手く動かせなくなってきた。ラーリーは、小さな病院のドアをつきやぶるように開けて、医者のマディじいさんに、ジェシーを見せた。マディじいさんは険しい顔をして首をふった。ラーリーの顔には絶望の色があった。

ねえ、ラーリー。あなたに出会えてあたし、すっごく幸せだった。愛って、ものを知った。町の人にもたくさんお世話になった。勝気なアロアもいつもおいしいお肉を持ってきてくれた。そんなにさびしくなかったよ。気付いたら夜になっていた。出会った時と、夢を話してくれた時と同じ満天の星。だれかがどこかで、言っていた。星に願いをかけたら、叶うんだって。だから、流した涙だけ、星の願いは強くなる。祈った分だけ、世界はさらに光り輝く。あたしは先にいくけれど、あなたといつかまた会えるから、その時はたくさんお話してね。それまでいい子で待ってるね。たくさん幸せをありがとう。たくさん愛をありがとう。あなたが星にかえるその日まで、笑顔でいてね。ラーリー。

私の家のとなりには、大事なあの子がねむっている。買い物に出かけて、帰ったら血を流してたおれて。本当びつくりした。マディじいさんが言ってた。あの子のきずはおそらくライオンのものだと。

じゃあ、家にライオンが来たの?。どうして?こわい。でもあの時ライオンはいなかった。きつとせいっぱいたたかかって、私が来る前に追い返してくれたんだよね。だから私には何もなかった。まだあの子の死を完全に納得できてないし、ふと涙が出る。でも助けてくれた分がんばろう。いつか会えることを星に願って。また会えた時は、またいっしょに星を見よう。だから、その願いが叶う時まで、私らしく生きるよ。あなたが最後まで守ってくれた、この命で。ね、ジェシー。

